

『こころ』は自然主義批判か：ゾラの『実験小説論』との関連で

毛利，郁子
九州大学日本語文学会：会員

<https://doi.org/10.15017/7181940>

出版情報：九大日文．42，pp.2-18，2023-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



『こころ』は自然主義批判か

—ゾラの『実験小説論』との関連で—

毛利 郁子

一、はじめに

一九四〇年二月、『フランス・ジャポン』47号に掲載されたフランス人パスカル・ロー（Pascal Lau）の「フランス人が『こころ』を読むと」で、ローは漱石が『こころ』で自然主義批判をしていると主張する。

Le naturalisme l'emportait sur toutes les tendances en 1900. N'atuné Sôseki, à peu pre seul de sa génération, luita contre cet enguement Son Kokoro nous révèle un comatissance plus ou moins directe de l'ecole des psychologes francéais. ③（自然主義が一九〇〇年頃、あらゆる風潮の中で優位にあった。夏目漱石はその世代でた一人、『こころ』でそれ（自然主義）への熱狂と戦い、多かれ少なかれフランスの心理学派たちを知っていることを明らかにした。）

ローは漱石が、自然主義が優位にあった中で、「それへの熱狂と戦った」という強い表現を使っている。

しかし日本では『こころ』が自然主義批判であるという論は全くといっていいほどなかった。たしかに漱石は自然主義の流派には入らなかった。それゆえ自然主義を批判してもおかしくない。実際田山花袋の『蒲団』④に対しては批判する。だがそれも「熱狂と戦う」というほど強いものではない。

しかしフランスでは自然主義批判だと考えられる。この論の筆者パスカル・ローは特別名のある文学者ではなく、一ジャーナリストとして、一フランス人としての発言である。フランス人は一般的に『こころ』を読んで自然主義批判と考えるのである。

なぜこのような違いが生じるのだろうか。考えられ得るのは「自然主義」はなんであるかに違いがあるのではないかということである。フランスの自然主義と日本の自然主義とそれぞれ明確にする必要があるのではないかと考えられる。それぞれを明確にすることにより日本とフランスの『こころ』に関する見解の相違の問題を解決することができるのではないだろうか。まずはフランスにおける自然主義とはなにかを考察する。

二、フランスにおける自然主義

フランス自然主義(naturalism ナチュラリズム)とはなんであろうか。自然主義(naturalism)はエミール・ゾラ(Émile Zola, 1840-1902)が「カリチュール紙」(La Caricature)一八八〇年二月七日「Triomphe de Naturalism (ナチュラリズムの勝利)」という題で記事が掲載され

たとき、初めて明確に公に向って用いられた言葉であった。一八七九年「演劇における自然主義」(『文学論集』一八六五—一八六九、藤原書店、二七頁)でこの「新しい言葉自然主義」と述べているので、そのころ発案されたということは間違いない。ゾラが自然主義の定義者であることは日本でも認められていることである。



『自然主義の勝利』(『カリカチュール』紙の1880年2月7日号に掲載された戯画)

「自然主義の勝利」としゾラは勝ち誇って馬に乗っているようにみえる。ゾラはどのようにして「自然主義」を定義したの

か。ゾラが独自に作りだしたのだろうか。

ゾラに影響を与えたのはイッポリット・テーヌ(Hippolyte Taine, 1828-1893)であったと考えられる。テーヌはその弟子にあたるポール・ブルジェ(Paul Buryet, 1832-1935)によって、次のように描かれている。

M.Taine and M.Renan were the two most illustrious representatives of these doctrines. (テーヌ氏とルナン氏はこれらの教義のもっとも有名な代表であった。)(ポール・ブルジェ『ドメスティック・ドラマ』三頁)^③

テーヌとルナンはその教義の代表であったとされている(ルナンについては拙稿『九大日文28』号参照)。テーヌはこの教義、すなわち french naturalism(フランス自然主義)の師であった。日本では『英国文学史』(Histoire de la littérature anglaise, 1864)^④の「緒言」でよく知られていたが、それだけで時代を代表するとまで表現されたのだろうか。テーヌの著作は翻訳されていないが、『評論および史論集』(Essais de Critique et d'Histoire, 1865)^⑤「知性論」(Intelligence, 1870)、『英国についてのノート』(Notes sur l'Angleterre, 1872)、『芸術哲学』(Philosophie de l'Art, 1865-1882)など多数ある。日本では翻訳されていないものも多く、よく知られていない。『英国文学史』でさえまだ全訳されていない。ところがフランスでは、『評論および史論集』以降の著作の冒頭には「精神的事象における依存関係と諸条件」^⑥という論文がすべて附随していた。それ

は『評論および史論集』の第二版序文として一八六六年三月に執筆されたものであり、第二版（二八六六年）以後の全著作に掲載されたものである。漱石も所有していた『英国についてのノート』*Notes sur l'Angleterre (Notes of England)*⁽⁶⁾にも掲載されたのである。それゆえ当時のフランス人たちにとって衆知のものであった。日本人では漱石が *Notes of England* を英国留学中購入し、線引きもあるので読んでいることは確実である。その後は一九五三年に瀬沼茂樹に邦訳されるまで日本ではほとんど知られていなかった。この論の最初は次のようである。

この方法は次のような言葉のうちに完全に含まれている。すなわち、精神的現象は物理的事象と同じく依存関係および諸条件を持つているということである。（イッポリット・テーヌ「精神的現象における依存関係と諸条件」『文学史の方法』瀬沼茂樹訳、岩波書店、一九五三年一〇月、六八頁）

この論は一見すると簡潔であるが、実は複雑な理論である。まず「精神的現象が物理的事象と同じである」ということと、そのどちらもが「依存関係と諸条件」（これは有機体の理論をもつ）ということは別のことである。この論は二つの意味を持つため注意する必要がある。第一に精神的現象と物理的事象とが同じであるということ、また第二に物理的事象と精神的現象は「依存関係と諸条件」を持つているということである。それゆえ二つを分けて考察する必要がある。ここではまず第一の精神的事

象は物理的事象と同じであるということのみを考察する。

それではその物理的事象とは何か。テーヌはこの論文で、物理的事象の例として、ジョン・スチュアート・ミル⁽⁸⁾（John Stuart Mill, 1806-1873）の帰納法、キュヴィエ⁽⁹⁾（Frédéric Dagobert Cuvier, 1769-1832）の諸性格の関係性、ジオフロア・サン・ティレエル⁽¹⁰⁾（Etienne Geoffroy Saint Hilaire, 1772-1844）の有機体の均衡性及び組成の同一性と類比性の原理やダーウイン⁽¹¹⁾（Charles Robert Darwin, 1809-1882）の自然淘汰の原理を挙げている。そして精神的現象である文学もそこで言われた関係を同じように持っているというのである。このミル、キュヴィエ、サン・ティエル、ダーウインたちは「naturalist」（ナチュラリスト）と呼ばれている。そして文学はナチュラリストが見出した法則と同じであるというのである。ナチュラリストたちが見出した物理的事象の法則が精神的現象、文学にも当てはまるということである。

「の「naturalist」（ナチュラリスト）は「自然主義者」と読むと、意味が通じない。それではどのような意味であろうか。辞書で調べてみよう。

Naturalists are experts in or students of natural history. ... Naturalists research and observe living organisms in their own environments, such as animals and plants. （ナチュラリストは自然史のエキスパートや研究者である。ナチュラリストは動物・植物のような我々自身の環境を探求し、観察するものである。）（オックスフォード事典）

オックスフォード事典において「ナチュラリスト」は自然史(natural history)を研究するものとされている。広辞苑では「博物学者」である。「博物学者」は他の意味もあるが「natural history」と記されたところに「動物学・植物学・鉱物学・地学などの総称」とある。オックスフォード事典でも、広辞苑でも natural history を研究するものである。natural history を研究するものが「ナチュラリスト」であり、「博物学者」である。

ナチュラリストとは、自然史を研究し、動物学、植物学の研究者である。ダーウインも動物・植物を研究し、「進化論」を唱えたナチュラリストであり、博物学者である。当時、このような自然史での研究が目覚ましく進んでいた。これを文学に取り入れようとテーヌは提言しているのである。この考え方がフランスを支配したのである。

ここでテーヌが挙げている例証を一つ見てみよう。

ナチュラリスト(博物学者)は、動物界の一部類、あるいはまた一部門においても、あらゆる種属を通じて同一の構造団が見出せるということ、犬の足、馬の脚、蝙蝠の羽、人間の腕、鯨のなどは、それぞれの異なつた使用目的に適するように、部分的に幾分委縮したり伸長したりしているが、解剖学上は同一のものであることを示している。同じような方法によって、歴史学者は、同一の芸術家、同一の流派、同一の世紀、同一の人種にあつて、地位、性別、教

育、性格の極端に対立した人たちがすべて共通の類型、すなわち根源的諸能力、諸性向の核心を現わし、この諸能力・諸性向が種々様々に要約され、組み合わせられ、生長させられて、その群の数限りない差別相を創り出していることを示すことが出来る。(ジョフロア・サン・ティレエル)(テーヌ「精神的事象のおける依存関係と諸条件」『文学史の方法』八三頁)

サン・ティエルが、動物界には共通のボディプランがあり、それを変形することで、イソギンチャクや、ヒトデや、さまざまな動物が生まれるという研究成果を出し、そこから動物を分類した。それは文学にも適応できるとテーヌは考えたのである。テーヌはバルザック(Honoré de Balzac, 1799-1850)を評して次のようにいう。

バルザックは「私は社会科学の博士である」といつていた。ジョフロワ・サン・ティエルの弟子として人間の博物誌を書くという計画を発表した。動物のカタログがすでに作製せられていたから、人間習俗の財産目録を作ろうと思ひ、また実際作つた。(イッポリット・テーヌ「バルザック」(Journal Debats, 1853)) 瀬沼茂樹訳、『文学史の方法』岩波書店、一九五三年
一〇月、二〇三頁

バルザックは、ライオンや犬や狼が存在するように、芸術家や役人や弁護士が存在すると、あらゆる職業の人間を、地方も

パリも同じく描き出す「人間喜劇」を創作した。これはテーヌの提言「精神的事象は物理的事象と同じである」という説の具体例である。文学は物理的事象と同じ方法で叙述されている。

「ナチュラリスト・バルザック」とテーヌは何度もいうが、これは「自然主義者バルザック」ではなく「博物学者バルザック」の意味であった。このように「博物学に学ぶ」というテーヌの提言は、フランスの若者たちの興味を引いたと平岡晃はいう⁽⁸²⁾。当時のフランスの文学者たち、フローベルやバルザックたちにも影響した。とりわけダーウインの「進化論」の影響は大きく、アナトール・フランス (Anatole France, 1844-1924) も『文學生活』⁽¹³⁾の中で「自分たちフランスとポール・ブルジェ」のバイブル(神)は「進化論」であったと⁽¹⁴⁾いう。フェルディナンド・ブリュンティエール (Ferdinand Brunetier, 1806-1884) も『文学史を進化の過程として捉えた『文学史の方法』』を執筆するのである。

このような「文学者はナチュラリストたれ」というテーヌの提言がフランスの文学者たちに与えた影響は大きかった。しかしテーヌの影響力はあまり日本では語られなかった。ポール・ブルジェの文献からテーヌの役割の大きさがわかるのである。しかし日本ではゾラとテーヌとの関係を、影響しているとはいいが、具体的に語った論は少ない。沖田吉穂 (『フランスの近代小説の力線』水声社) が二〇一八年に「博物学と自然主義は同じではない。しかし博物学者と自然主義者はともに「ナチュラリスト」であり、これを形容詞として用いれば「自然主義の」という限定は「博物学」という規定ともはや区別がつかない」

と論じている。

なかでもテーヌの提言に最も賛同したのがゾラであった。ゾラは『テレーズ・ラカン』⁽¹⁵⁾ (二八六七年) を書く。

私が観察したかったのは性格(キャラクター)ではなく、気質(タンペラマン)であった。そこで自由意志を奪われて、神経と血に翻弄され、人生の節目節目で肉欲という宿命にひきずられていく登場人物を選んだ。テレーズとロランはいわば「人間の皮を着た獣」でありそれ以上のなにもない。：悔恨という呼び方をしたが、これも生体器官の一不調、張りつめて各章が生理学の珍しい実例となつていくことがわかるはずだ。」(ゾラ『テレーズ・ラカン』第二版序文『ゾラ・セレクション』宮下志朗訳、藤原書店、二〇〇一年九月、二七四頁)

ゾラは生理学から考察し、気質とは体液理論の延長にあるものであるとする。当時神経質、多血質、胆汁質、粘液質という四気質の存在は信奉されていた。そして心理も生体器官の働きの一つであるとした。各章が生理学の例証となつているという。『テレーズ・ラカン』は激しい攻撃にさらされ、«la littérature pulvride»(腐った文学とまでいわれ、それに対する反論であった。しかし自分のことを Le groupe d'irrivains naturaliste (ナシヨナリストの作家グループ) といい、ナシヨナリズムという言葉はまだ使っていない。

次にゾラは『ルーゴン・マッカード叢書』⁽¹⁶⁾（二八七―九三）の計画を立てる。これはバルザックの「人間喜劇」が目標だった。バルザックは人間を分類して、社会を描こうとした。それは博物学者サン・ティエルに倣ったものであり、バルザックも社会を分類した「博物学者」すなわちナチュラリストであったことは前述した。

しかしゾラはバルザックを称賛しつつも独自の方法をとろうとする。

私の作品は社会的というより科学的なものになるだろう。バルザックは三千人の人物を使って風俗史を書くようにする。そしてその歴史の基盤を宗教と王政におく。…私の作品は全く異なる。枠組みはより限定される。私は現代社会を描こうとするのではなく、一つの家族を描き、環境によつて種族が変貌する作用を示したい。歴史的枠組みを受け入れるのは、反応する環境が必要だからある。私にとつて肝要なのは、もっぱら博物学者（ナチュラリスト）、生理学者であることだ。原理（王政、カトリシズム）ではなく法則（遺伝、先天性）を援用しよう。」（*Documents et plans préparatoires des Rougon-Macquart, 1866-69* 玉井崇夫『実験小説論』再考『文芸研究』75 明治大学学術成果リポジトリ、一九九六年二月、九八頁）

ゾラもまた博物学者であろうとする。人間を生物学的に研究し、遺伝や環境を詳細に調べ描いた。アデライド・フークとい

う神経病の女を健康な農夫ルーゴンと結婚させる。しかしこの男が死んだ後、マッカードというアルコール中毒の愛人ができて、ルーゴンとマッカードとの間にもうけた複数の子どもたちの系譜が、様々な職業、生活、性格を持つて描かれる。政治家、銀行家、商人、労働者、娼婦、農民、女中、軍人などあらゆる階級の人間が描かれる。

七作目の『居酒屋』（二八七六）で成功を収め、メダンの別荘で祝賀会を開催した。モーパッサンやユイスマンズなど多くの作家が集った。『居酒屋』では飲酒癖という遺伝をもつジェルヴェーズが描かれる。田舎からパリに出、洗濯屋を懸命に励み、一時は宴会を開くなど成功するが、一緒に暮らす屋根職人のクーパーが屋根から落ち怪我で働けなくなりアル中になる。昔の男もやってきてジェルヴェーズに依存するようになると、ジェルヴェーズは大酒を飲むようになり、仕事はなくなる。街頭に客引きにでたが、顧みられず、貧窮の極みに陥り、餓死する。遺伝と環境がジェルヴェーズを破滅に至らす。

次の作品『ナナ』執筆中、一八八〇年クロード・ベルナール（Claude Bernard, 1813-1878）の『実験医学序説』⁽¹⁷⁾から『実験小説論』⁽¹⁸⁾を執筆した。その年「カリチュール紙」（*La Caricature*）で、二月七日「*un Triomphe du Naturalism*」（自然主義の勝利）という題で記事が掲載される。ここで、*Naturalism*（自然主義）「ナチュラリズム」という言葉が使用される。自然主義という言葉はゾラが発案、定義したのである。

ゾラの『実験小説論』をより詳しく見てみよう。ベルナール

は当時の医学が経験主義であったのに対し、医学を科学的な道に入らせようとした。それが実験的方法であった。実験の方法とは長い間、生物には適用出来ないものとされてきた。だがゾラは、実験的方法が物理学や生理学や医学に取り入れられるなら、生理学から自然主義小説にも取り入れられるはずであると考えた。

例としてバルザック著「従妹ベット」のユロ男爵の形象をあげよう。バルザックの観察した総体的事実は、一好色男の氣質が彼自身に、その家族、社会にひきおこす災難である。かれは主題をえらぶとすぐ、観察した事実から出発し、つぎにユロを一連の試練に従わせ、いくつかの境遇を経させることによって実験に着手し、その情熱機能の作用を示した。それゆえそこには単に観察だけではなく、実験もあることは明らかだ。」(ゾラ「実験小説論『フランス文学全集7』」東西五月社、一九六〇年三月、四六一頁)

さらにゾラは続ける。自然主義小説は作家が観察に助けられ、人間にこころみる真の実験である。これまで技術だった医学が一科学になった。文学そのものも実験的方法によって科学になるのだ(「実験小説論」四七一頁)と。作家が観察にもとずいてある場合を設定し、ある情熱がある環境の中で行動した場合、因果の自然的な関係、自然の法則により、個人的、社会的見地からみていかなる現象を呈するかを描くことになる。それによつ

て観察による予想観念が検証されることになるから、ひとつの実験なのである。(しかし、こうしたことが自然科学上の実験とおよそ違い、作家の主観の構成物であることはまぎらわしうがなかったという批判もあつたのであるが。)

さらにある人間現象が「なにゆえ (pourquoi)」にそうなっているかを書くよりも、自然科学の成果や方法を考慮して「いかにして (comment)」そうなっているか、つまりどのような機構、どういう唯物論的必然的因果関係でそうなっているかを書くべしとした。そこにはデテルミニズム(決定論)がある(「実験小説論」四六五頁)。小さい観察事実をあつめ、取捨し、配列して、人生のいかにしてを書けば、その作品の終局的意味は結局浮かび出る。結末が自然に必然的に決まるのである。それが決定論の意味である。

このデテルミニズムはテーヌが用いた方法でもあり、先述した博物学者たちから学んでいたものであつた。テーヌが博物学者から学ぶ物理的事象の例として、ジョン・スチュアート・ミルの帰納法が述べられていた。ミルについては、『英国文学史』book V の chapter 5 (邦訳されていない)ですでに漱石は学んでいたと思われる。このミルの影響をテーヌは受け、テーヌは連想心理学派に連なっているのである⁽⁹⁾。この学説は一八世紀中葉、感覚あるいは観念を、外界の事物が感覚器官に作用することによつて生じる大脳中の振動に対応させたハートレーにより生理学的説明が加えられ、心理学的体系に発展し、一九世紀中葉に居たり、連想心理学として、ミル父子、バインによつて完成さ

れた。ハーバート・スペンサーはダーウインの進化論を取り入れてこれを進化論的連合心理学に拡大した。テヌもこの連合心理学派にはいる。テヌは生理学の方法を使って心理学に取り入れたのである。子ミルは刺激対象、感覚器官、感覚体験を分けた。感覚器官である脳（心理的機械）が、刺激対象から刺激を受け、感覚体験である印象、観念をもつ。それは今脳に起こっている事実であるから「小事実」である。フランス語で「petits faits」、英語では「little facts」である。印象、観念、記憶、予想は、脳という身体が震えている「小事実」なのである。「小事実」の総和が文学である。人間の心理も生理学から説明する。また「小事実」は一本の幾何学の線のように連鎖し、結果が原因となり、原因が結果となる。前後の観念の関係は因果関係であり、無限な過去からの連鎖であり、現在という焦点意識となる。因果の連鎖であるから、偶然的な要素は含まれず決定論になるのである。

ゾラはテヌのいう決定論を用い、実験的方法をもちいることで「自然主義」を創作したのである。もちろんナチュラリストから学び、その方法も取り入れ、生理学から、遺伝、環境を考慮し、実験的方法で叙述するのが「自然主義小説」である。

自然主義文学には、ゾラの別荘メダンで集い「メダン夜話」に発表されたモーパッサン(Guy de Maupassant, 1850-1893)の『脂肪の塊』(二八八〇)⁽⁹⁾ またゴンクール兄弟(Edmond de Goncourt, 1822-1896, Alfred Huot de Goncourt, 1830-1870)の『ジェルミニー・ラセルトウ』⁽¹⁰⁾ (一八六五)が挙げられる。ゴンクールは一人のヒステ

リーの女中の生涯を徹底した生理学的解剖・分析によって描き、それを「愛の臨床講義」とした。

この時代のフランスの作家たちはバルザックやフローベルを含め、多岐にわたるナチュラリストたちの影響を受けたのである。それを提言したのは、もちろんテヌであったが。それをさらにゾラによって遺伝、環境を観察し、実験的方法を取り入れ、自然主義小説を創作したのである。

ここでフランスの自然主義とは何であつたかもう一度確認する。

- ・ナチュラリストたちの成果を取り入れること
- ・人物を生理学・解剖学で観察し、遺伝、環境をとりいれること
- ・実験小説であること
- ・決定論であること
- ・モラルを問題視しないこと

三、漱石のフランス自然主義認識

それでは漱石はこのフランスにおける自然主義を認識していたのだろうか。非常によく理解していたと思われる証拠が漱石の蔵書の中にある。漱石の「英国留学中購入図書リスト」⁽¹²⁾をみると「一九〇〇年一月〜一九〇一年九月」No.179 までには購入日と購入額がきちんと書き込まれている。そのNo.178はテヌ(TANN)の『Notes on england (『英国についてのノート』)であ

る。テーヌはフランス語で書いたもので、その英訳者がある。英訳者 W.F. Rae はその本の序文で、「翻訳者のテーヌについての経歴を紹介した後、他の著作同様、「精神的事象における依存関係と諸条件とについて」を英訳していた。元来は『評論および史論集』*Essais de Critique et d'Histoire* の第二版序文として一八八六年三月に執筆されたものであり、この論集の第二版以後の全般に掲載された。このテーヌ *Notes on england* を購入した一九〇一年九月あたりから、漱石の行動は変化していく。

一九〇一年九月七日（土）

博物館展示館 (Natural History Museum) に行く。(荒正人『漱石研究年表』集英社、一九七四年十月、一九一頁)

博物館展示館は大英博物館 (British Museum) の博物関係の資料を展示するところである。大英博物館のうちでも、自然史の部門を見学に行ったのである。ナチュラリストたちの成果を直接知りたかったのである。フランス文学とはそのようなナチュラリストたちの成果をもとに書かれているとしたら、ナチュラリストたちが何を発見したのか、見ておかなければならないという気持ちであつたろう。そしてナチュラリストたちの理論だけではなく、ゾラが医学から学んだように、様々な科学を学ぶ必要があると考えたのであろう。漱石がなぜ科学を学んだのかは日本では疑問であつたが、このような背景を考えれば、納得のいくことである。

一九〇一年九月一二日（木）寺田虎彦充ての手紙で
「僕は留学期限を一年のばして仏蘭西へ行き度が聞届かられさうにもない」（一九一頁）

九月二二日（日）鏡に手紙をたす。

近頃は文学書は嫌になり候科学上の書物を読み居候……」（一九二頁）

それ以降購入記録に、科学の著作が増えていく。リボー (Richard S. Lyell, 1839-1916) の『感情の心理学』⁽²³⁾ は「感情生活の進化」を取り扱っている。ベンジャミン・キッド (Benjamin Kidd, 1858-1916) の『西洋文明の原理』⁽²⁴⁾ は社会進化についての論である。ダーウィンの『進化論』は当然購入する。ボールドウィン (J.M. Baldwin, 1861-1934) の精神発達の社会的倫理的解釈』⁽²⁵⁾ はダーウィンの説に影響を受けた発達心理学についての著作であり、後、要旨を一四枚のノートにまとめる。漱石は留学中、フランス文学にはナチュラリストの影響があるということを知り、それは無視できないものだと思つただろう。テーヌが提唱した理論、ゾラが提唱した自然主義、どちらにせよ科学を学ぶ必要があると漱石は判断したのである。留学の残りを科学の勉強に勤しんだのである。

しかし、漱石が渡英したころにはもうすでにゾラの文学の時代は終わろうとしていた。自然主義には攻撃が加えられていた。一八八七年八月一日ゾラの弟子といわれる五人から「フィガ

口」紙に「五人宣言」⁽²⁶⁾として反旗があがっていた。同じ年フエルディナンド・ブリュンティエール(Ferdinand Brunetiere, 1806-1886)が『自然主義の破産』⁽²⁷⁾を執筆した。進化論を信奉していた者たちも信仰へ帰っていく。

そして一八八九年ベルグソン(Henri Louis Bergson, 1859-1941)は『時間と自由』(Time and Free Will)⁽²⁸⁾で、合理主義や科学的思考を批判して、生の非合理的で根源的な姿を捉えようとする立場を主張した。これは二・三エッセイ文学や二〇世紀の実存主義文学へと発展する。また同じく一八八九年、ポール・ブルジェの『弟子』が発表され、科学への疑問を呈し、人間の意志を重視し、芸術の方向は大きく変化していく。

——今日の科学、誠実にして謙抑な今日の科学は、その分析の終局に「不可知」の世界の広がりがあることを認めています。(ブルジェ『弟子』内藤濯訳、岩波書店一九四一年一月二一頁)

不可知の世界、科学の届かぬところがあることを示唆する。この時代、無意識がフロイトより早く発見され、科学の様相も変化してきたのである。それとともに文学も世紀末文学へと移行していく。神秘主義、象徴主義、デカダンス文学が花開いていた。ユイスマンも『さかしま』⁽²⁹⁾をだし、想像力が問題となり、「人口楽園」、「伝説の世界」、「夢」が語られた。これらは、それまで芸術に割り当てられていた目的、すなわち「自然の忠

実な模倣という至上命題」を文学から決定的に切り離れたとフランス人ジャン・ピエロ⁽³⁰⁾はいうのである。

科学を学んでいた漱石、自然主義を学んでいた漱石にとつてこの変化は衝撃であつたのではないか。一九〇〇年頃は移行期で、新しい流派が始め、しかしまた古い流派の著作もあり混乱していた。ブルジェの『弟子』をいつ頃読んだのかは明確にはわからない(漱石の購入記録が乱れている)が、留学の終わりから、日本に帰った後であろう。その混乱の証拠が漱石の文学理論に表れている。島田厚は「漱石の思想」⁽³¹⁾で「文学論」は究極において決定論に陥つたスペンサーやバインをはじめ、その亜流哲学者や進化論的連合心理学派の立場だという。ところが「哲学の文学的基礎」(明治四〇年)では、自由意志への余地が残され、ウィリアム・ジェームス(William James, 1842-1910)⁽³²⁾の影響があつたと述べている。意識に関する二つの意見の対立があつたことを意味している。漱石の思想の変化はヨーロッパでの文学傾向の変化の反映でもあつたのである。

パスカル・ローはこのようなフランスでの論争や問題を認識していた。フランスではナチュラリズム(Naturalism)とナチュラリスト(Naturalist)の関連がはつきりしていたので、ゾラのいうナチュラリズムも日本のように混乱しなかつた。だが日本では「ナチュラリスト」が「博物学者」として訳されてしまったので、「ナチュラリズム」の意味が不明確になった。それではパスカル・ローがいう「自然主義批判」だというのは『ハ』ころのどのような面であろうか。

四、『L'Inconnu』における自然主義批判

フランス自然主義に抗議をし、終焉をもたらしたものの一つは、ブルジェの『弟子』であった。冒頭にもある通り、ブルジェは、フランスの心理学派 (*l'école des psychologues français*) と称される。ブルジェは人間のこのころの不可知さ、人の心理を理解することの難しさを多くの著作で著していく。漱石所有の著作だけでも、男性から見た女性のこのころの不可知、夫婦の間の不理解、村人から誤解されていた少女、友人との軋轢など多くの人々の間の関係を描いていく。自然主義の心理は、いわば生体器官の働きであり、『後悔』などとは一種の器官の不調であった。しかしブルジェはこのころは簡単に理解出来るものではないとするのである。

『このころ』は「先生」と「私」が出会い「私」は「先生」から学びたいと思い、「先生」に向つていく。「先生」は人と人との解りあえないことを自ら体験し、誰とも、妻とさえ、分かち合おうとしない「淋しい」人間になっている。人間のこのころはたとえ親友であったとしてもわからない、不可知なものなのである。

それでも「私」は「先生」を理解したいと思う。ただ単に不可知では終わっていない。漱石所有のブルジェの著作に一九〇八年の『家名の重圧』(*The Weight of the Name*)⁽³³⁾がある。大人になるまで自分の息子だと思っていたが、実は妻の不倫の子だと

知り、疎んじるようになる。しかし子どもの中から育てた情愛を思い出し、このころの交流を取り戻す。人と人が理解することの困難を描きながらも、交流しようとする。この著は弟子森田草平が、漱石死後「先生遺愛の書」として手にとったものである。ただ不可知としていた人間関係にすこしでも歩み寄りを求める。『このころ』でも弟子との関係において、遺書という形でつながりを残すのである。

次に人物の造形の問題がある。自然主義文学では生理学的、生物学的に人間を創り出す。しかし『このころ』では、思想的傾向が重きを置かれる。

たゞ欺ういふ風に物を解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちやんと備はつてゐたのです。…此性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後來益他の徳義心を疑ふやうになつたのだらうと思ふのです。それが私の煩悶や苦悩に向かつて、積極的に大きな力を添えているのは慥ですから覚えてゐて下さい。

私の気分は国を立つ時に既に厭世的になつてゐました。他は頼りにならない物だといふ觀念が、其時骨の中迄染みこんでしまつたやうに思はれたのです。(略)鉛を呑んだよやうに重苦しくなることがありました。

時々彼等に対して気の毒だと思ふ程、私は油断のない注意を彼らの上に注いでゐたのです。

さうかと云つて、起つて行つて障子を開けて見る訳には猶行きません。私の神経は震へるといふよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。(『こころ』一九三頁)

このように何度も疑い深い性格がくり返し述べられる。

他方Kは真宗寺に生まれた男で、観念的傾向がある。中学にいた頃から宗教とか哲学とかというむずかしい問題で「先生」を困らせるというように、Kは思想的な環境で育ち、Kは経験以前に「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだ」、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という観念をつくりあげていた。Kは自分の意志で乗り越えていこうとする人物でもある。

このふたりの造形に生理学的、生物学的要素はあるだろうか。たしかに親からの遺伝や環境もあるが、思想的傾向が大きいように思われる。生物学や生理学の見地から造形されてはいない。さらにその心理が重要である。Kの「覚悟」ということばの意味をめぐつて「先生」は疑う。Kはその性格通り「覚悟」の意味を「お嬢さんをあきらめる」と考えた。なぜならKの「道のためならならすべてを犠牲にすべき」「精進」という主張があるからだ。ところがKは自分の意志を貫くという性格から「お嬢さんへ向かう」と「先生」は考えるようになる。「覚悟」という言葉に反対の意味を見出すことになる。それによつて「先生」

はお嬢さんへの求婚を母親に告げるというKに対して卑怯な行動にでる。ところがKは自殺してしまう。この時の心理の動きを自然主義との関係で考察してみよう。

連想心理学派の考えでは、観念は因果の連鎖によつていたがテーヌは、全く反対の観念が出現するのはあり得ることであると考え、次のような意見を持つ。

情熱の闘争が行われるのは観念の領域においてである。なにかを欲し、かつ苦しむとは、二つの相反する考えを代わる代わるもつことであり、第一の考えを失うまいとし、しかももう一方の考えの不意の激烈な到来を感じることである。人間の心とはあたかも、恐ろしい光景を前にして眼をおおうために、つないでいた手を振りほどこうとする子供のようなものである」。(イッポリット・テーヌ『新評論』一八六四年三月一日号) (『現代心理論集』二九八頁)

テーヌにとつて「人が悩む」とは観念と観念の闘争であつた。デカルト流に観念の上にあるものを認めないためである。しかし、もしテーヌ流の観念連合で執筆しているのであれば、「覚悟」の意味は「お嬢さんを得る」か「お嬢さんをあきらめる」かどちらかの結果が出るだろう。しかしKはどちらも選ばず、「自殺」という思いもしない結果が出る。テーヌ流の観念連合では説明のつかないものになる。これはまさに反自然主義になるのではない。漱石はテーヌ流のデテルミニズム(決定論)を否定

したのである。

『このころ』の読者は読み進める内に、Kの死という予期せぬ出来事にであう。さらに奥さんやお嬢さん、Kの姉、父がなにも疑わないうところに疑問を感じる。「自然主義」小説であれば、Kの死は起こらず二人の争奪線がくり広がるだろう。もしKが死んだとしても、周囲から疑われ、むしろ社会からの非難で「先生」は苦しむだろう。奥さんやお嬢さんは疑いを持ち、環境が影響してくるであろう。その結果として、「先生」の行動は「後悔」という生体器官の不調によって死に至るかもしれない。それがデテルミニズム、決定論に陥ることである。「先生」は皆に責められ、結末は悪いものにしかない。

さらにゾラは作家が観察にもとずいてある場合を設定し、ある情熱がある環境の中で行動した場合、因果の自然的な関係、自然の法則により、個人的、社会的見地からみていかなる現象を呈するかを描くとし、それによって観察による予想観念が検証されることになるから、ひとつの実験なのであるとした。疑い深い「先生」と周囲の思惑を来にせず真つ直ぐに進むKを対立させ、予想観念を検証したことで実験をしていると考えることもできるであろう。しかしここで実験は失敗に終わる。普通に予想した結果は出てこないからである。これは実験の失敗と言えるだろう。実験小説であれば、お嬢さんと奥さん、周囲の友人、Kの父、姉たちが『先生』にたいしてなんらかの疑問を呈してもおかしくはない。そのことは現在でも疑問視され、なぜ奥さんはわからないのかと疑われる。しかし『このころ』は、

思考の予知不可能により、予測した結果は出てこない。『弟子』においても、若者は女性のころを理解できず、女性を死に追いやってしまう。グレルーはまさに実験するが、実験は失敗してしまう。観念連合はある部分までは有効であろうが、人間の認識はそれを超えてしまう。

以上、決定論ではない、実験小説ではないということによって反自然主義であることを明らかにした。

さらに「モラル」問題に関して反自然主義の立場をとっている。テーヌは『英国文学史』の「緒論」Ⅲで次のように記している。

消化作用・筋肉運動・体温に原因があると同様に、野心、勇氣・真実性にも原因がある。悪徳や美德も、硫酸や砂糖のやうに生成物だ。(テーヌ『英国文学史・第一巻』平岡昇訳、岩波書店、一九五三年 一月 一七頁)

自然主義小説であれば、悪や徳も外的原因によって起こったことになる。本人にはなんの罪もない。それを起こさせる環境が悪いのである。しかしどんなに悪い環境にしようが、悪を行わないことができる。それが人間である。『このころ』において、『先生』はKに対して行つた自分の行為がKを自殺に追い込んだのではないかと自問する。だがKは「先生」を責めるような遺書を残さない。周囲のだれも「先生」に疑いの目を向けることはない。Kの姉や父、お嬢さん、奥さん、友人たちさえだ

れも疑問には思わない。それでも「先生」は自分の罪を問いつけるのである。自分のところだけが知っていることだからである。環境が影響しないところの問題だからである。

『テレーズ・ラカン』では夫を殺した後、愛人につけられた首の傷、夫の母親から疑われ、死体置き場の亡霊など外的な物や人から責められる。そして追い詰められ、愛人を殺そうとする。愛人もテレーズを殺そうとし、互いに死に至る。ここに心理はない。『こころ』と『テレーズ・ラカン』では全く異なっている。特にゾラが描く自然主義小説では遺伝や環境が重視され、それらに決定された人間が描写され、破滅へと導かれていく。

「先生」は深く悩み、自ら「死」を選ぶ。環境はなにも問題を起こさない。確かに「乃木殉死」に影響されたとはいえ、「明治の精神に殉死」という生理学的理由ではないものが理由となつて死ぬのである。

以上漱石の反自然主義に関して考察した。不可知の世界が描かれ、決定論でも実験小説でもない。しかもモラルが重視される。フランス自然主義の立場からみれば、『こころ』は反自然主義といえるだろう。それではなぜ日本で、反自然主義だといわれなかったのか。次章で検討する。

五、終わりに——なぜ日本では漱石『こころ』を自然主義批判と評価しなかったのか。

日本の自然主義は坪内逍遙にはじまり、テーヌ論も言及して

いた。そのころダーウインの進化論やスベンサーの社会学、コントの実証主義なども日本に紹介されていた。逍遙は「人間を科学的に捉えた上で、小説はあらゆる人々のかかる人情の内容を漏らすことなく、己の意匠で勝つてに人情を漏らすことなく世態の真を写さねばならない」とした。逍遙は「一言一句たりとも傍目の助言を下すことなく」、ただ「ありのまま」に自然の赴きを写すべき」としたのであった。逍遙もテーヌの『英国文学史』を読んでいた。しかし、テーヌ研究は、部分的にはなされたが、当時それほどなされてはいず、後年翻訳されたが、そのもつ意味は明確にはならなかった。また「自然主義」はゾラがプレス・キャンペンでも主張したことであつたので、ゾラの科学的な理論が日本に伝わり、ゾラの模倣は永井荷風においてなされている。荷風は次のように述べる。

フローベル、ゴンクール等の小説家は自然なるものを自然のままに模倣することを以て真に芸術的価値あるものと叫べり。彼らは翻々たる想像を以て理想化せられたる人生よりも正直にありの儘を写し出せしものこそ却つて人生そのものの真実を発揮せるものなりと称し、如何なる罪惡の行為も猥雑の事件を憚ることなく寫出しつつありしなり。(永井荷風「エミール・ゾラと其の小説」、『女優ナナ』解説、新声社、一九〇六年五月、五五〇頁)

この時点で逍遙、荷風は「自然」という言葉を「ありのまま」

と置き換えている。ナチュラルという言葉は「ありのまま」に置き換えられている。ナチュラリストが「博物学」とされたため、「自然史」を研究するナチュラリストの面が考慮されなかった。

このような中日本自然主義は島崎藤村の『破壊』を生み出す。『破壊』は日本の前期自然主義の成果となる。ところが、「ありのまま」を選んだ日本では、次の田山花袋の『蒲団』が出現するにおよび、『蒲団』が日本自然主義の代表とされた。中村光夫は「花袋にとって「自然」は「自我」の代名詞であり、「自分の内面も亦自然である。他の宇宙が自然であるように、矢張り自己も亦一自然である」という。自己を「自然」の代表者と見なした以上、花袋にとって、作者を離れた人間典型を創りだす作業はよいものにみえた。そして『破壊』と『蒲団』の闘いは『蒲団』の勝利におわり、中村はその後の日本の小説は『蒲団』の子孫という。

ナチュラリストたちの成果、自然史を学ぶ博物学者の成果から始まったフランス自然主義、「自然の忠実な模倣という至上命題」をもった自然主義は、日本では「ありのまま」と解され、自然だけではなく「こころ」の「ありのまま」とも解されることとなった。そこで日本自然主義はフランス自然主義と大きくわかれ、その子孫たる我々に、漱石の『こころ』を自然主義批判と位置つける視点を失わせてしまった。

【注記】

- 1 Pascal Laut 「Lorsqu'un Français lit "kokoro"」 *France-Japon* 47, Paris: 1940
- 2 夏目漱石「田山花袋君に应えふ」『国民新聞』明治四十一年一月三日
- 3 8Poul Bourget, *Domestic Dramas*. Trans. by W. Marchant. New York: C. Scribner's Sons, 1901 p3
- 4 722 H.A.Taine, *History of English Literature*. Trans. by H.van Laun. London: Chatto & Windus, 1906 (イッポリット・テーヌ『英国文学史』平岡昇訳、創元社、一九四〇年)
- 5 H.A.Taine, *Essais de Critique et d'Histoire*. Paris: Tonrouse 1866
- 6 イッポリット・テーヌ「精神的事象のおける依存関係と諸条件」『文学史の方法』瀬沼茂樹訳、岩波書店、一九五三年一〇月、六八頁
- 7 723 H.A.Taine, Trans. by W.F.Rae. *Note of England* London: Strahan&Co. 1873.
- 8 前掲 6 八一頁

ジョン・スチュアート・ミル A System of Logic

博物学者は、最初の事例が現れると、必ず第二の事例が続いて現われるというように、密接に結びついた対をなす事実の相関関係を取り出して定義した。…精神科学においても、物理学の場合におけると同様に、対をなす事実の相関関係を取り出し、すなわち事物の諸条件と依存関係とを取り出し、時には人間の手を偉大な機構のうちにさしこんで、ある小さな歯車の位置をかえたり・また舊に戻した許すような研究こそ有効な研究なのである。

9 前掲6 八二頁 キュヴィエの法則たる諸性格の關係性。フランスの古生物、比較解剖学者。

博物学者は齒牙・胃腸・四肢・本能そのほかのいろいろな器官がそのうち一つ変化するなら、ほかのものも必然的に変化をおこす。同じように歴史学者は一個人、一人種、一時代の様々な能力や性向がお互いに結びついていること、これらの所与の能力や性向の一つが、一人の隣人において、または接近した一団体において、これに比例した変化を決定するというような関係にあることを、注意することができ。

10 前掲6 八二頁 ジョフロア・サン・ティエルの法則たる有機体の均衡性

博物学者はカンガルーや蝙蝠に見られるように、一動物の器官が極度に発達する時は、これに応ずる他の諸器官が衰退、退歩することになることを立証した。同じように、歴史学者はゲルマン民族における道徳的能力やインド民族における形而上的、宗教的能力にみられるように、一つの才能が以上に発達すると、その同じ種族において、これに反比例する諸能力が退歩することになることを立証できる。

11 前掲6 八四頁 ダーウインの自然淘汰の原理) イギリスの自然科学者

博物学者は環境の勢力があたかも自然の場合には、自然の氣候、風土に一番よく適合できる動植物を登場させるように、歴史の場目には、その年代や人種を思想を解釈し、完成することのできる芸術家、哲学者、宗教

家。改革者、政治家を登場させること

12 平岡昇『プロボー』白水社、一九八二年十月、四〇八頁

13 アナトール・フランス『文學生活』朝倉季雄・權守操一訳、白水社、一九五五年八月、三八頁

14 ブリュンティエール『文學史の方法』小場瀬卓三・安土正夫・平岡昇訳、未来社、一九五五年八月

15 エミール・ゾラ『テレーズ・ラカン』篠田浩一郎訳、講談社、一九七一年二月

16 エミール・ゾラ『ルーゴン・マッカール叢書』

『ルーゴン家の誕生』"La Fortune des Rougon", 1870.

『獲物の分け前』"La Curée", 1871.

『バリの胃袋』"Le Ventre de Paris", 1873.

『ブラッサンの征服』"La Conquête de Plassans", 1874.

『ムーレ神父のあやまち』"La Faute de l'Abbé Mouret", 1875.

『ウージェーヌ・ルーコン閣下』"Son Excellence Eugène Rougon", 1876

『居酒屋』"L'Assommoir", 1876, 1925 Emile Zola

『愛のページ』"Une page d'amour", 1878.

『ナナ』"Nana", 1879.

『つた煮』"Pot-Bouille", 1882.

『ボヌール・デ・ダム百貨店』"Au Bonheur des Dames", 1883.

『生きる歓び』"La Joie de Vivre", 1884.

『ジェルミナル』"Germinal", 1885.

『制作 (英語版)』"L'Œuvre", 1886

- 『大地』"La Terre", 1887
- 『夢 (夢想)』"Le Rêve ", 1888.
- 『獣人』"La Bête Humaine", 1890.
- 『金 (かね)』"L'Argent", 1891.
- 『壊滅』"La Déréalité", 1892
- 『パスカル博士』"Le Docteur Pascal", 1893
- 17 クロード・ベルナル『実験医学序説』三浦岱栄訳、岩波文庫、一九三八年三月
- 18 エミール・ゾラ『実験小説論』『フランス文学全集7』成瀬駒男訳 東西五月社、一九六〇年三月、四六一頁
- 19 ポール・ブールジェ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版局、一九八七年二月、三二二頁
- 20 ギー・ド・モーバッサン『脂肪の塊』広津和郎訳、新潮社、一九三八
年『メタン夜話』(*Les Soirées de Médan*) の一篇として 1880.4 シャルパ
ンティエ社から刊行された。
- 21 エドモンド・ゴンクール『ジエレミー・ラセルトゥ』大西克和訳、岩
波文庫、復刊、一九九三年三月
- 22 東北大学漱石文庫『英国留学中購入図書リスト』漱石全集二七巻「二
一三頁」
- 23 Theodule Ribou. *The Psychology of Emotion*. London: Walter Scott, 1897)
- 24 Benjamin Kidd. *Principles of Western Civilisation*. London: Macmillan &
Co, 1902
- 1058 J.M.Baldwin. *Social and Ethical Interpretations in Mental Development*.

- New York: Macmillan Co. 1897
- 26 五人宣言 Manifest de Conq
- 27 F. Brunetiere. *Le Roman naturaliste* (1891) 所収の論文 La Banqueroute du
naturalisme (1887) p330
- 28 H.Bergson. *Time and Free Will*. Trans. by
F.L.Pogson. London: S.Somnenschein
& Co. 1910
- 29 J.K.Huysmans. *The Cathedral*. Trans.by C.Bell. London: Kegan Paul. 1898
- 30 ジャン・ピエロ『デカダンスの想像力』渡辺義愛訳、白水社、二〇〇四
年六月、一八頁
- 31 島田厚『漱石の思想』『夏目漱石』日本文学研究資料刊行会、有精堂出
版、一九七三年三月、一一五頁
- 32 W.James. *The Varieties of Religious Experience*. London: Logmans and Co.
1902
- 33 Paul Bourget. *The Weight of the Name*. Trans.by G.B.Ives. Boston: Little
Brown & Co. 1908
- 34 河内清『ゾラと日本自然主義』梓出版社、一九九〇年九月、五頁
- 35 中村光夫『風俗小説論』河出書房、一九五一年三月、八二〜八四頁
- 【付記】 838 722 などの記号は漱石の「蔵書目録」『漱石全集二七巻』から出
典
- (九州大学日本語文学会会員)